

第 3 回健康と環境に関する疫学調査検討会 における主な意見



検討事項

(1) これまで（第2回）の議論の整理について

- ①データの共有・活用について
- ②遺伝子解析について
- ③エコチル調査を通じた人材育成について
- ④参加者維持の取組について

(2) エコチル調査参加者、関係学術団体からのヒアリング

- ①エコチル調査参加者への質問、回答
- ②日本産科婦人科学会の発表に関する質問、意見
- ③日本学校保健学会の発表に関する質問、意見
- ④日本精神神経学会の発表に関する質問、意見

(3) その他

- ①広報・参加者とのコミュニケーションについて
- ②希少疾患の解析について
- ③思春期以降のフォローアップについて

検討事項（１）これまで（第２回）の議論の整理について

①データの共有・活用について

●各分野の研究者との共同研究は、健康影響の発生原因について考察を深めるための有効な手段であることから積極的に検討してほしい。

②遺伝子解析について

●遺伝子異常に関する解析データは特に機微なデータとなるため、データの取扱いのみならず解析結果の利用法も含め前広に専門家で議論を尽くし、有意義な成果につなげてほしい。

③エコチル調査を通じた人材育成について

●多数のポスドク、講師、ファシリテーターの方々がエコチル調査に関与し活躍されたということはインパクトがあるのでよい。

④参加者維持の取組について

●参加者維持のための取組の工夫がよくわかる貴重な資料であり、各ユニットセンター間で情報を共有してほしい。また、エコチル調査以外の類似の取組にも活用できるものである。

●13歳以降も調査を展開してほしいと強く思っているが、これまでの保護者主導で調査に参加している体制では参加者の維持は困難と思われるため、エコチル調査は今後新たな段階に入るという強いメッセージを示す等の工夫をして、子どもたち自身に積極的に参加していただけるような環境づくりが必要である。

検討事項（２）エコチル調査参加者、関係学術団体からのヒアリング

①エコチル調査参加者への質問、回答

- （初めてエコチル調査を紹介されたときの印象について）

面白そうだなと感じた。

- （なぜ参加しようと思ったか）

自分にできることで何か役に立てるならと思い参加した。

子どもが大きくなった時に、子どもにとって良い影響があるのではないかと感じ、参加した。

- （質問票調査に関するエピソード・意見について）

発達に関する質問で、自分の子どもは成長が遅く、出来ないことが多く焦った記憶や、他のお子さんはどれくらい出来ているのか思いながら書いた記憶がある。

父親用の質問票について、家事の様子などいろいろ書いた記憶がある。

子どもが大きくなってからは、子どもに質問票を書かせるのも良いのではないか。

- （参加者さんとのコミュニケーション活動に関する感想について）

ニュースレターとして送られる冊子を楽しみにしていて、毎回目を通してしている。

- （ニュースレターで記憶に残っている記事や特集について）

調査結果が一般の人向けにわかりやすく簡単に書かれている内容など興味深く見ている。

参加者の子どもの写真が多く、楽しそうな印象を受ける。

イベントやクラブ活動の参加は子どもが楽しみにしている。

検討事項（２）エコチル調査参加者、関係学術団体からのヒアリング

①エコチル調査参加者への質問、回答（続き）

●（学童期検査について）

採血が出来るか不安だったが、採血するスタイルを抱っこする方法に選ばせてもらい、スムーズにできたので安心した。本人も自分の意思で採血に協力できたという達成感があるようだった。

採血について採れるか心配があったが、泣かないでできたようだった。

●（エコチル調査について負担に感じたこと・辞めたいと思ったことについて）

質問票の内容で、子どもの成長について少し不安になることはあったが、辞めようと思ったことはない。

不快だ、という話になったことはない。質問票の「できるかできないか」という問いに対して、どのように回答したらよいかという話を家族ですることが多かった。

●（お子さんとのエコチル調査に関する会話について）

学童期検査の前に、説明の冊子を用いて、学童期検査の内容やエコチル調査について説明した。子どもは理解はしていない様子だったが、調査に参加できることを楽しみにしているようだった。また、検査のある日は、調査について理解してくれるようになった。

将来的に色々なことが分かるという話をしたが、本人がどのようにとらえているかは分からない。

「研究結果」について「こういうことが分かったんだ」ということを少しずつ感じているところはあると思う。

検討事項（２）エコチル調査参加者、関係学術団体からのヒアリング

①エコチル調査参加者への質問、回答（続き）

- （今後エコチル調査に対して参加者として期待することについて）

分かったことを分かりやすく公開して頂きたい。対象の子どもたちが親世代になった時、何かの役に立つ情報になっていると嬉しい。

調査結果が出た際に、自分が関係してきた中で、これからどのように過ごしていくのが良いのか、どのようなことが悪いかということが分かる子どもになってほしい。

- （次のお子さんを授かった時にどんなことがあればまたエコチル調査に参加したいと思うか）

1人目と2人目について情報が錯綜しないかという不安はあるが、参加すること自体は、役に立てると思う。

1人目が参加する中で何か支障があれば2人目の参加については考えたかもしれないが、これまで調査に協力する上で困ると思ったことはなく、2人目が参加するとなると、質問票を追加でもう一つ書くくらいかなと思う。

- （これまでエコチル調査で発表された研究成果について興味を持ったものについて）

妊婦の体重と体型がどのように生まれた子どもの出生時体重に影響するのかという研究結果。

インフルエンザワクチン接種の子どもへの効果についての研究結果。子どもへのワクチン接種の意義についてあらためて考える機会となった。

検討事項（２）エコチル調査参加者、関係学術団体からのヒアリング

②日本産科婦人科学会の発表に関する質問、意見

- 妊娠合併症の調査とは現在エコチル調査に参加している子どもたち（小学生）が将来妊娠する時を想定しているのか。
- 調査項目の提案について、妊孕能など踏み込んだ内容のものが多く、現場でこのような情報を取得することはどの程度可能と考えられるか。

③日本学校保健学会の発表に関する質問、意見

- 学校教育において児童の健康状態がデータ化されており、エコチル調査のデータのデジタル化を進めていくにあたって参考になるのではないかと。また、学校健診のデータと連携することは有意義ではないか。
- 教科書にエコチル調査自体が掲載されることだけでなく、エコチル調査の成果が掲載されていくことも必要である。また、学校の先生方への周知も重要だと考えるが、エコチル調査として何か取組を考えているか。
- 子どもたちが学校で過ごす時間は小学校・中学校へ進んでいくと長くなっていくため、学校での生活ぶりやデータをどのようにエコチル調査に反映していくか、また教育関係者とどのように連携してエコチル調査を周知し、成果を伝え、応援団を増やすか、ということも検討してほしい。
- 子どもたち自身が積極的に調査に参加したいと思えるように、エコチル調査の認知度を上げて、エコチル調査に参加していることの意味付けを子どもたち自身が感じられるようにすることが望まれる。したがって、エコチル調査が教科書に載ることは意義が大きく、様々なチャンスをとらえてエコチル調査の存在を社会に発信していくことが重要である。

検討事項（２）エコチル調査参加者、関係学術団体からのヒアリング

④日本精神神経学会の発表に関する質問、意見

- これまでのエコチル調査の中で自閉スペクトラム症など発症した方は継続して調査に参加しているのか。
- 今後年齢が上がっていく子どもたちを調査していく中で、行動パターンなど今までにはなかった調査項目等についても考慮していく必要があると思われるため、既存のシステムとの連携やエコチル調査へのアドバイスをお願いしたい。

- DALYにおいて、10歳代から心の問題について占める割合が上がっていき、15歳から20歳になると心の問題が全体の2割から3割を占めるようになる。WHOもメンタルヘルスの重要性を指摘している。

東京都で約4,000人を対象にしたティーンコHORTではChildren with special health care needsという人たちがおよそ8人に1人いて、うつ病も多いという結果が得られている。

エコチル調査も精神科、児童精神科の専門家や、小児科で発達障害を専門としている人たちの協力のもと、適切な評価項目を作ってもらいたい。

- 日本にはデンマークなどで整備されている疾病レジストリがないことが問題。

現在は、エコチル調査参加者の疾病情報を得るためには、主治医に別途依頼して必要な情報を用紙に記入してもらう必要がある。

臨床情報である疾病レジストリとの情報連携を進めていくことが重要であり、参加者の疾病情報等の転帰を追うことができればコHORT内介入研究も可能ではないか。

- 遺伝子解析について、得られた結果を確証し臨床医につないでいくことが重要と考えており、エコチル調査とどのように連携するか等について今後相談させていただきたい。

検討事項（3）その他

①広報・参加者とのコミュニケーションについて

- エコチル調査の参加者である子どもたちに、思春期・青年期・成人期以降も参加を継続していただくためには広報の役割が重要である。

幼児期はキャラクターが効果的だが、思春期・青年期になるとキャラクターではなく別の効果的な方法を考える必要がある。

思春期に入ると保護者にも本心を相談しなくなることもあるので、日本精神神経学会からもアプリの紹介があったが、たとえばLINEなどで本人の精神状態をサポートするアプリは良いアイデアと考えられる。

参加者が成人した後は、エコチル調査に参加することで、参加者自身にとってどのようなメリットがあるかが重要であり、例えば不妊関係の情報は女性にとってかなり関心が高いテーマであるので、これらの観点からメリットを提示できればよい。

- 参加者コミュニケーション委員会および各ユニットセンターでは、これまで、参加者とのコミュニケーションを大切にして、ニュースレターやイベント、セミナーなどを行ってきた。

参加者にエコチル調査の意義を理解していただき、安心して参加していただくことで、調査票の回収率を維持し、学童期検査の参加率をあげることに繋がっている。

これまでのコミュニケーションの対象は主に保護者であったが、今後は子ども本人とのコミュニケーションが大切であり、情報提供やイベントの参加だけでなく、研究内容や成果の活用などについても参画してもらうことが重要と考える。

英国のALSPAC(Avon Longitudinal Study of Parents and Children)研究での participants engagement の取組などに学びながら、研究者、参加者が一体となって研究を推進していく仕組みを作る必要があると思う。

検討事項（3）その他

②希少疾病の解析について

- 希少疾病について、現在のエコチル調査で単一要因が原因となっている疾病はどの程度の罹患率であれば検出できるか教えてほしい。

③思春期以降のフォローアップについて

- 思春期をどのようにフォローするかが大切である。

環境物質による子どもへの健康影響が主目的だが、医学的な成長段階の環境影響も大きく、環境省を超えた大きな枠組となることを期待している。

子どものコホートであるとともにすばらしい母子コホートでもあり、女性の生涯の健康リスクや妊娠がリスクの窓となっている調査として、女性の健康状態の把握について、問診票レベルでもよいので、どこかのポイントで（母親を含む）参加者の健診を実施するような取組があってもよいと考える。